

---

## 中世アジアの皮革 1. 西・南アジア

元北海道大学農学研究科 竹之内 一 昭

---

### 1. はじめに

動物の皮は原始時代から利用されており、特にオリエント（西南アジア）では、皮革製造の技術が進んでおり、バビロニア（メソポタミアの中心都市）やペルシャ（現在のイラン）の革は優れておりヨーロッパにもたらされていた。その後、民族の移動もあり、皮革製造技術がヨーロッパ各地に普及した。8世紀以降、コルドバ革やモロッコ革、ハンガリー革のような地名の付いた特色ある革が製造されるようになった。フランスやイタリア、イギリス、ドイツ等においても、製革が盛んになった。一方、アジアにおいては、世界に名声を博するような革は少なかったが、革は広く利用されていた。

先の論文で述べたように、ヨーロッパの皮革史に関する論文は幾つかあるが、アジアに関してはほとんど無い<sup>1)</sup>。しかし、遺跡からの出土品や一般的な歴史書、旅行記等から皮革に関する状況を知ることが出来る。

### 2. アルメニア・グルジア

最近、アルメニアの洞窟で発見された牛革製の靴は紐付きでほぼ完全な形をしており、これが放射性炭素年代測定により紀元前3500年頃のものであり、世界最古の革靴であるとロイター通信が報道した(2010.6.10)。この靴は1枚の革で足を包み、

紐で結ぶ様式のものである。これまでは太古の靴としては、紀元前1300年のエジプト遺跡、紀元前2000年頃のタクラマカン砂漠遺跡、紀元前2500年頃のオランダの遺跡、紀元前3300年頃のイタリアの氷山から発見されたものなどがある。

アルメニアでは古くは農家から牛や馬、羊、山羊、駱駝の皮を集め、石灰漬で脱毛し、銚刀で裏打ちし、粉碎したスモークツリー（うるし科のはぐまき）の葉の液に3週間浸漬して鞣した<sup>1)</sup>。羊や山羊の皮は革袋としてチーズやバター、ワイン等の保存に利用された。グルジアでは脱毛に木灰が用いられ、鉱泉の水で処理されたが、これは明礬鞣しであると考えられる。桂の葉や<sup>かしわ</sup>櫨の樹皮も鞣し剤として用いられた。なお古代においてアルメニアの羊毛や毛織物はフェニキア（現シリア沿岸地方一帯）を経てギリシャ、ローマにもたらされた。その後幾世紀を経てヨーロッパに広まった。

14世紀のイブン・バットゥータの「大旅行記」のキプチャック大草原（黒海沿岸）の章では、草原の遊牧民はアラバと称する高輪の荷車に天幕を積んで移動する生活をしており、その天幕は木の骨組みを細い革紐で縛り、フェルトもしくは羊毛製織布で覆われていたとある<sup>2)</sup>。さらに学者や聖者は上質の山羊の毛皮コート（ファルジーヤと称する）を着ており、市場での男は山羊皮の上着を着て、山羊皮で作った円錐形の

粗末な高帽子（クラーと称する）を被っていたとある。厳寒の時、毛皮の服とズボンをはき、羊毛製の短靴と麻織の短靴、さらにブルガーリーの短靴を履いた。ブルガーリーは北方のブルガールやルス（ロシア公国）地方の特産であり、狼の毛皮を裏張りした馬革である。マルコ・ポーロの1271～1295年の旅行記「東方見聞録」に、大カーンが兵士の中から選ばれたケシタンという騎兵隊に金のベルトとカムトすなわちボルガル（Borgal）と称する長靴を与えたとある<sup>3)</sup>。これは前述のブルガーリーと同じものあるいは同類のものであろう。

馬乳酒（キミツ）の製造、貯蔵のために革袋が使用された。羊の胃袋は米や粉、バター等の容器として利用された。サマルカンド（ウズベスキタン）では、王から貂の皮衣を贈られたとある。北方圏の白貂・黒貂・灰色栗鼠・銀狐・鼬等の毛皮はイスラム圏で珍重され商人によって西アジア地域やトルコ、さらには中国にももたらされた<sup>2)</sup>。

パリの宝石商の子であったジャン・シャルダンの1660年代の「ペルシャ紀行」によれば、黒海沿岸のウクライナのトルコ人やタタール（タルタル モンゴル）人は裏地を羊の革としたラシヤの縁無し帽を被っていた<sup>4)</sup>。コーカサス（カフカス）の山には、

虎・豹・ライオン・狼・ジャッカル等が無数に生息し、それらの毛皮が交易されていた。グルジアの貴族は太くて厚い革ベルトをしており、それに短剣や火打石、砥石、塩、胡椒、針、糸等を入れる革袋を付けていた。そして水牛の革のサンダルを履いていた。多くの人は裸足であった。この地方では、絹や亜麻糸、亜麻布の他に貂やビーバーの毛皮および牛革が輸出されていた。

### 3. ペルシャ

イスラム帝国アッバース朝は8世紀にバグダッドに都を定めてから大いに発展した。イエメンはアラビア半島南端の要衝としてバグダッドと交易が盛んであった。1972年にイエメン最大のイスラム寺院からアッバース朝時代（8世紀）のコーランが大量に発見された<sup>5)</sup>。これは羊皮紙15,000ページ分であった。1冊のコーランを作るのに300頭分の羊皮を必要としたと言われている。紙の製法が中国から伝わってくるまでは羊皮紙が書写材料として利用されていた。「ペルシャ紀行」には、ペルシャ人は迷信が強く、紙のお守りの代わりに、羊皮紙や犢皮紙のお守りを用い、またお墓の柵に金文字で祈祷文が書かれた犢皮紙をぶらさげていたとある<sup>6)</sup>。

図1は中世のアジアの戦闘を描いた同時

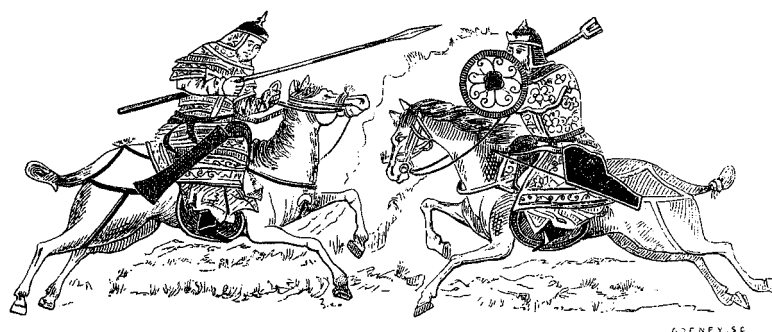


図1 中世アジアの軍人  
(ペルシャの細密画)

代のペルシャ細密画である<sup>3)</sup>。鎧は「東方見聞録」で示されているキュアブアリー (Cuirbouly 煮革 茹革) 製であろう。これはバッファロー (水牛) あるいは他の獣の皮を熱処理して成形した。盾や矢筒、弓袋はトルコやコーカサス (カフカス)、中国のものと同様であり、革製であろう。

シャルダンの2度目の旅行の「ペルシャ見聞記」によると、ペルシャ人は上着の上にコートを着るが、これはラシヤカサテンで作られ、飾り糸や刺繍で装飾されていた<sup>6)</sup>。コートのあるものには黒貂の毛皮、その他のものには羊の毛皮が裏に付けてあった。種々の革が製造され、インドやトルコ、その他の近隣国に輸出されていた。靴は緑または他の色の粒状突起のあるシャグリーン革 (Shagreen leather, Chagrinleder) で出来ており、底は厚紙ほどの厚さの1枚革で踵がある。平底のものは駱駝などの革で出来ている。革細工の縫製は刺繍したかのようにきめ細かい。革製の桶は鞣していない羊皮の紐で縫い合わせる。シャグリーン革は驢馬の尻の皮を石灰脱毛してから、カズヴィーンの種子 (代用品としてマスタードの種子) を埋め込み、乾燥後、たたき出して削り、没食子 (ブナ科の若芽に蜂が刺傷して生ずる虫こぶ) と食塩で鞣す。ペルシャ語とトルコ語のサーガリー (Sagri, Saghri) は動物の「尻」を意味している。元々のシャグリーン革は鞣されていない皮から製造されたと思われる。18世紀のロシアのアストラハン (カスピ海の北方) では、ケノボジウム (アカザ科) の種を用いた粒状突起のあるすばらしいパーチメントが製造され、これをシャグレン (Shagren) と称し、後に西ヨーロッパではシャグリーンと称した<sup>1)</sup>。シャグリーン革はペルシャが起源であるが、その後、コンスタンチノーブル (トルコのイスタンブール旧名)、アルジェ (アルジェ

リア) およびトリポリ (リビア) 等でも上質の革が製造された。鞣し剤として明礬も使用され、また馬や駱駝の皮も使用された。染色は黒色が没食子と銅、青色がインジゴ、緑色が銅屑と塩化アンモニウム、赤色がコチニールと明礬をそれぞれ用いた。

ぶどう酒の容器として、瓶あるいは樹脂の塗った皮袋が使用された<sup>6)</sup>。革袋は古代ギリシャでも酒や油、水の容器として使用されていた。鞣には子山羊の皮が使用された。

#### 4. インド

インダス文明 (前2350～前1700) の栄えた地域からは武具とおぼしきものが出土して少なく、戦闘が少なかったことが想像される。この時代の一般的な衣類は綿織物の巻衣か腰巻であり、多くは裸足であった。羊毛を原料とした織物も衣服にしたが、皮革類も利用されたと想像できる。風神マルツが肩に鹿の皮をかけて贅沢な服装をしていたと語られている<sup>7)</sup>。バラモン教が生まれた紀元前15世紀頃には、動物皮からの革製造がなされていた<sup>8)</sup>。鞣皮性のある阿仙葉木 (アカシア属) やミロバラ (モモタマナ属) が豊富であった。紀元130年頃、中央アジアからガンジス川中流域まで統治したカニシュカ王の立像 (2世紀の作) は長いコートにズボン、革製の長靴という中央アジア風であった<sup>9)</sup>。

インダス文明にさかのぼるとされるシヴァ神は宇宙の創造、維持、破壊をもたらすとされており、その創造を示す太鼓を持って踊っている彫刻像 (11～12世紀) がある<sup>9)</sup>。今日でも大道芸で用いられている木製の胴部に山羊皮を張った振り鼓 (ダマル) はシヴァ神の持ち物とされている<sup>10)</sup>。また古くから用いられ、中世以降にその形が決まった古典楽器の太鼓は丸底の土器に

山羊皮を張ったものである。「大旅行記」では、スルタン（王）が儀式や戦闘に出立する時に、太鼓（ナッカール）やラッパをもった楽団が続くとある（図2）<sup>3, 11)</sup>。また王の旅行からの帰還式典では、楼台（山車）が出て、それには革製の水槽があり、誰でも水を飲むことが出来た。

北にクシャーナ朝、南にサータヴァーハナ朝が栄えた1～2世紀に経済活動が活発となり、インドからローマへ、胡椒などの香辛料、宝石、象牙細工等が送られ、ローマからは、ぶどう酒やオリーブ油、ガラス製品、陶器が送られた。皮革製品の交易は見当たらない。しかしながら時代が異なるが、9世紀半ばのインド洋海域を主舞台とする船乗りや商人の実見談によると、インド・東南アジア・中国・東アフリカ等から香辛料や薬物類、宝石等と共に動物の歯牙や皮革がアッパース朝の首都バグダッドの繁栄を支えていた。また東アフリカの象牙やべっ甲と共に豹の毛皮が西アジアや中国に輸出された。マルコ・ポーロの「東方見聞録」では、インドのガズラート（グジャラート地方）王国では、胡椒や生姜、インジゴ（藍）、綿花を大量に産するが、山羊や牛、水牛、野牛、犀等の皮をさまざまな方法で鞣し、赤く染め、鳥や獣の模様を飾

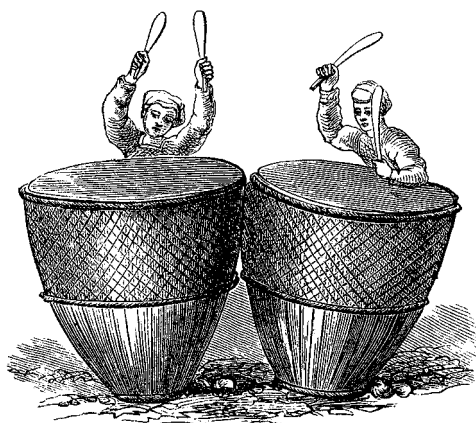


図2 ナッカール

り、金糸や銀糸で縫った製品を製造していた<sup>3)</sup>。これらはアラビアおよびその他の地方に送られていた。タナミ王国（ボンベイ近くの島）やカンバエ王国（カンベイ湾奥）においても、革が多量に生産されていた。

アッサム地方の聖者が上質の山羊皮のファルジーヤという外套をきていたが、これは一般には毛織布で作られていた<sup>12)</sup>。インドでは主に絹や綿、麻等で衣服を作っていた。高級な綿織物や絹織物はアラビア海やインド洋の各地に輸出されていた。山羊円文の錦織り布（絹織物）は有名であるが、山羊が多数いたことによるのかもしれない。履物として革靴やサンダル式の木履も使用されたが、一般的には裸足であった。このように獣皮があまり利用されなかったのはインドの暖かい気候のほかにもさまざまな民族が動物を大切にし、特に牛を尊重した宗教的な感情が影響していたと思われる。

## 5. 東南アジア

影絵芝居は中国はじめヨーロッパでも見られるが、東南アジアでは古くから盛んであり、今日でも日常生活に溶け込んだ民俗芸能である。ジャワの影絵芝居がバリやスマトラ、マレー半島、インドシナ半島に普及した。この芝居の起源は定かではないが、10世紀頃のロンタル（ヤシの葉を乾燥・成形したもの）に物語を刻画した一種の絵巻物のようなものから、11世紀頃あるいはもっと古くから水牛の皮や他の獣皮を透かし彫りした人形（ワヤン・クリート）をダランという語り手が操り白い幕（クリル）に映し出すようになり、13世紀後半から16世紀初めにかけて発達した。物語は祖先を称えるものや神話、古代インドの叙事詩「マハーバーラタ」や「ラーマヤナ」などから素材を取っている。なおインドでは、人形は羊皮紙を染色と透かし彫りをして作

り、エジプトでは羊皮紙の他に駱駝の皮を使用している。

## 6. まとめ

黒海沿岸やコーカサスの地域では、山羊や羊の皮が衣類に使用されていた。北方圏から貂や栗鼠、狐等の毛皮が西アジア地域にもたされた。ペルシャでは粒状突起のあるシャグリーン革が製造され、インドやトルコ等の近隣国へ輸出された。インドや東南アジアから香辛料や薬物類、宝石等と共に皮革類がバグダッドへ輸出された。東南アジアでは、水牛等の皮製透かし彫り人形による影絵芝居が盛んであった。

## 文 献

- 1) Körner, T.: "Handbuch der Gerbereichemie und Lederfabrikation", I-1, (Grassman, W. Hg) Springer-Verlag, Wein (1944) P. 1.
- 2) イブン・バットゥータ著 家島彦一訳：大旅行記 4, 平凡社 (1999) P. 15.
- 3) Henry Yule Translation : "The Book of Ser Marco Polo", John Murray, London (1921) P. II- 394, 341, III-392, IV-501.
- 4) シャルダン著 佐々木康之 佐々木澄子 羽田正訳：ペルシャ紀行, 岩波書店 (1993) P. 93, 354, 427.
- 5) 木村凌二：NHKスペシャル文明の道 ③海と陸のシルクロード, 日本放送出版協会 (2003) P. 126.
- 6) J・シャルダン著 岡田直次訳：ペルシャ見聞記, 平凡社 (1997) P. 169, 235
- 7) 鈴木良編：世界文化史体系 3, 古代支那及びインド, 誠文堂新光社 (1937) P. 294.
- 8) Kobert, T. : "Beitrager zur Geschichte des Gerbens und der Adstringentien", Verlag von F. C. W. Vogel, Leipzig (1917) P. 9.
- 9) 山崎元一：世界の歴史 3, 古代インドの文明と社会, 中央公論社 (1997) P. 177, 199, 235.
- 10) 小西正捷 佐藤宗太郎：インド民芸, 木耳社 (1977) P. 189.
- 11) イブン・バットゥータ著 家島彦一訳：大旅行記 5, 平凡社 (2000) P. 47.
- 12) イブン・バットゥータ著 家島彦一訳：大旅行記 6, 平凡社 (2001) P. 357.